学苑・生活環境学科紀要　No. 801　96～105（2007・7）

〔デザインノート〕

パブリックスペースに関するフィールドワーク報告
―新潟県十日町市におけるサイト・リノベーション―

杉浦久子・清水麻里

A Report of Field Works on Renovation of Public Spaces
―'Site Renovation' at Tokamachi, Niigata Prefecture―

Hisako SUGIURA and Mari SHIMIZU

This series reports on collaborative field works of Sugiura's laboratory on renovation of public spaces. The laboratory has carried out architectural studies and field works for joining human beings and space together. We aim at transforming dead spaces into living spaces with 'installations' which is a sort of contemporary art.

This shows our artwork exhibited in 'Echigo-Tsumari Art Triennial 2006', held from July 23 through September 10 in Niigata prefecture.

We used the very same site where we installed pieces of white netting at the prior festival in 2003. It was a creation of passages where eaves of some neighboring houses were connected with the white netting creating a cocoon for communication. But the site was damaged by the earthquake in 2004. Some houses were destroyed and an elderly resident killed. Naturally our work in 2006 had a consolatory meaning to both the dead and bereft people. The crochet work of 10,000 white motifs sewn together turned into white see-through walls in the air around which many people got together and renewed their souls.

■はじめに

研究室では，建築の立場から人と環境，場所の関係をテーマに研究や設計活動，フィールドワークを行ってきた。本稿では2006年度に行った主なフィールドワーク，並びにこれらに関して発表を行ってきたものを「パブリックスペースに関するフィールドワーク報告―新潟県十日町市におけるサイト・リノベーション―」としてまとめ，報告するものである。

■フィールドワークの背景と経緯

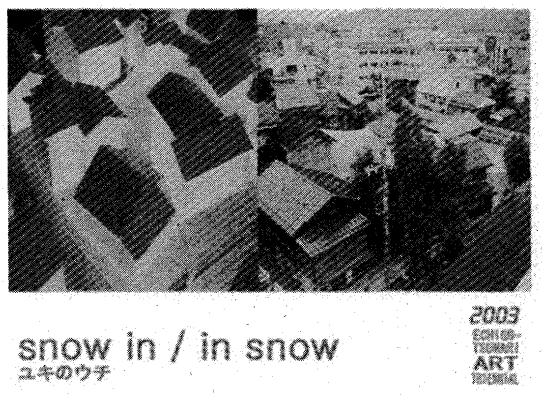
私たちが日常，空間で生活しているときには，建築も町も，連続的に空間体験している。個別の建物のみならず，繋ぎの空間も面白くならないと町は活性化しないのではないか，との思いからこのような活動に，およそ10年前から着手することとなった。スクラップ・アンド・ビルドの時代から，既に有るストックを見直してゆく時代へと変移する中で，当たり前のものとしてそこに存在している建築のみならず，様々な既存空間の質を再発見し，顕在化させ，新たなる場をつくりだすことも，建築的命題であると考えている。また，広い意味での既存のパブリックスペースや，場所の問題を考えることは，まちづくりのうえで意味を持つかと思う。

社会のインフラの大半が整えられた今日では，単に建てることのみならず，既存のものに加えることや差し引くこと，変更することや，積極的な意味において建てないことなど，場所に建築を建てるという行為そのものや，既にある場所の意味を見出し，建築物だけでなく人を含む空間全体を関係づけてゆくような空間環境のつくりかたや，その方法論が必要になってきていると考えられる。

■パブリックスペースにおけるサイト・リノベーション

ここで言う「パブリックスペースとは，文字どおりの公共空間と，私有地であっても公共性が高いと考えられるスペース」を指す。ポテンシャルは高いが，あまり活用されていない場所を活性化させる方法として，インスタレーションというアート的手法を用い，地域コミュニケーション

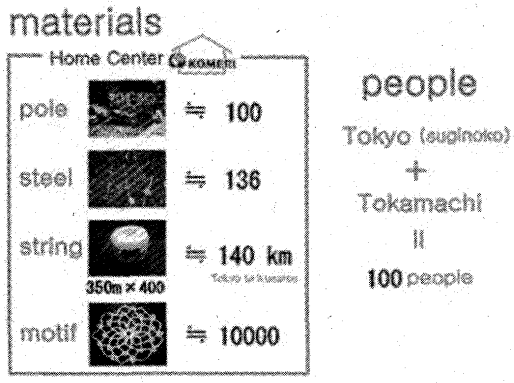
幸（ユキ）のウチ模型写真　制作: 杉浦研究室



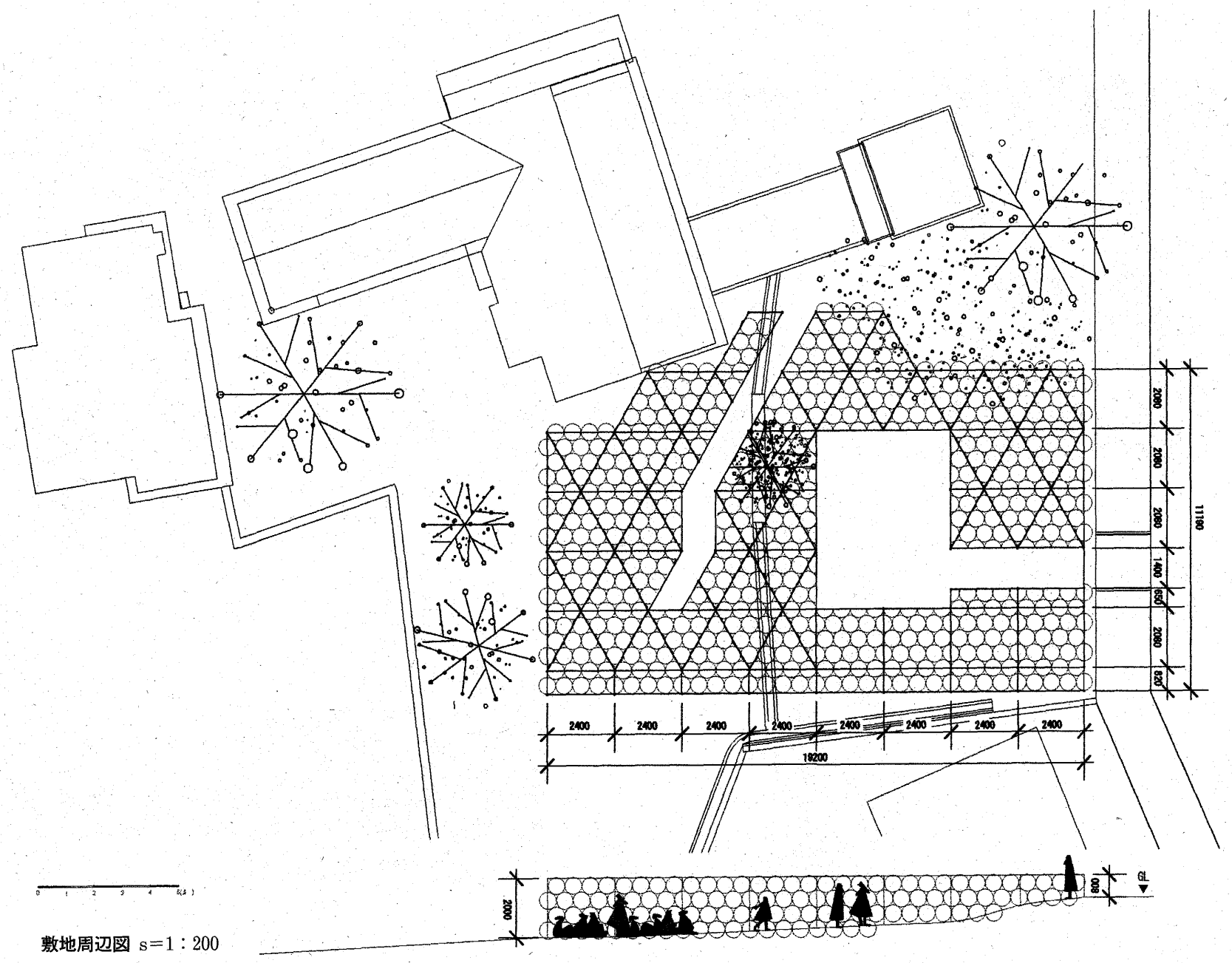
ユキのウチ（2003 年）模型写真 / 完成写真

2003 年から 2006 年にかけての敷地の変化（中越地震）

ユキのウチ（2003 年）会期中・施工の様子

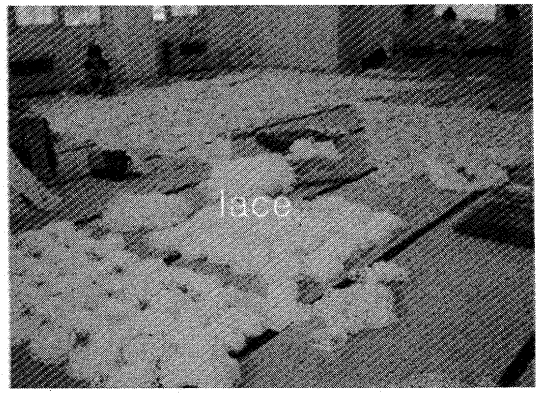


制作に使われたマテリアルとその量，関わった人々の数

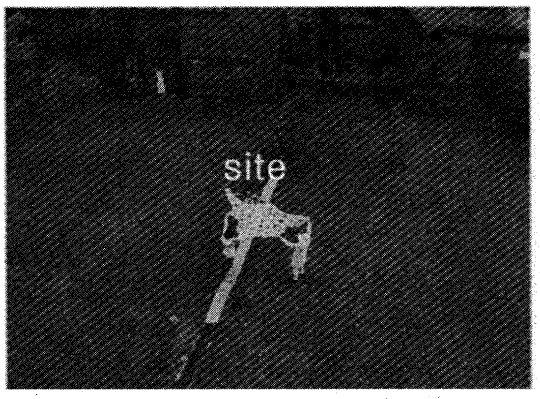

2400
2400
2400
2400
2400
2400
2400
2400
19200
2080
2080
2080
1400
650
2080
820
11180
2000
800
GL

敷地周辺図 s=1：200

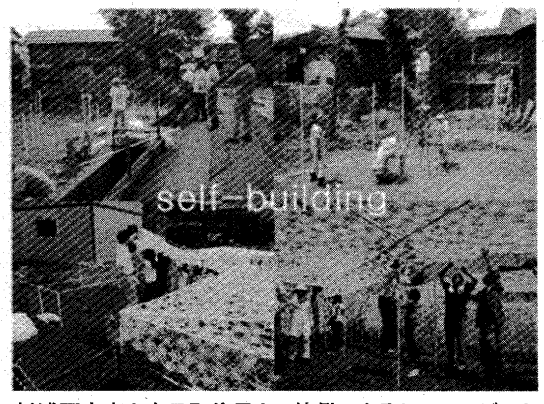
たくさんの人の手によってモチーフが編まれていく



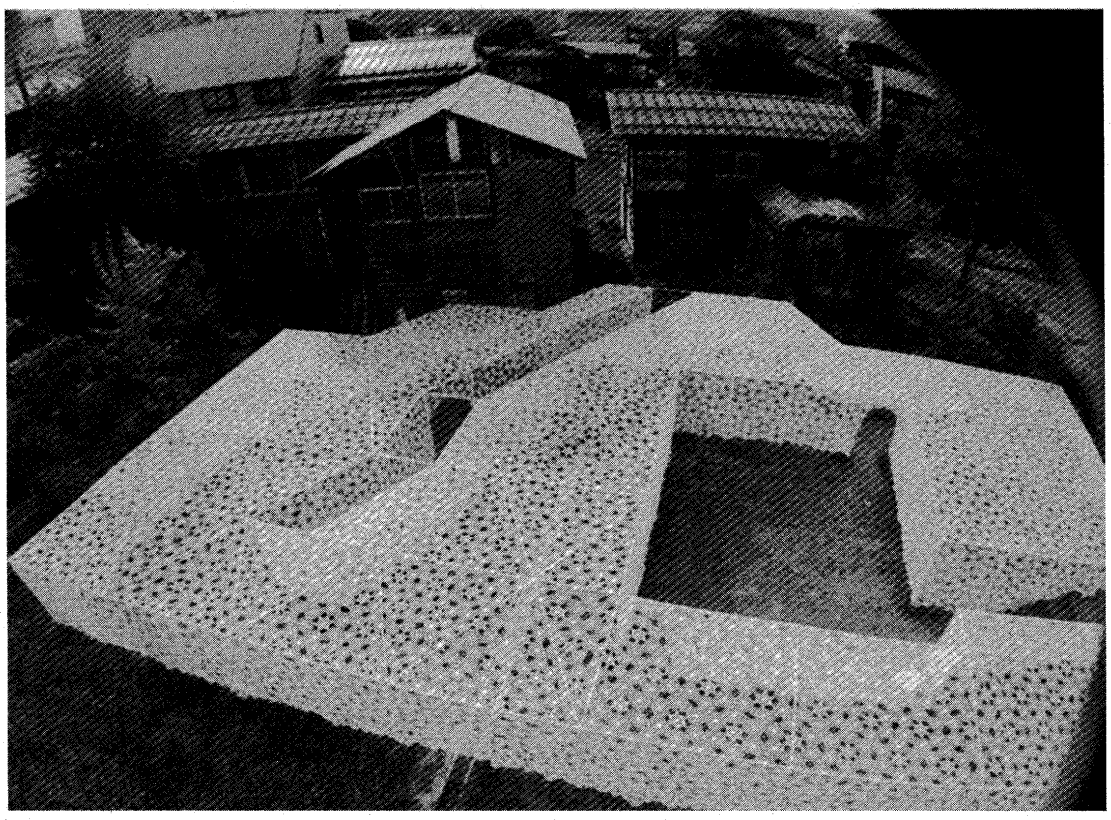
十日町流雪溝用水中継ポンプ場（60畳）での作業



敷地で三角につなげたシート（42モチーフ）を広げてみる



杉浦研究室と十日町住民との協働によるセルフ・ビルド


完成した「幸（ユキ）のウチ」を隣家の3階から見下ろす
ぽっかりと空いたヴォイドはそこに住宅があったことを想起させる

や，場をより良く使うことを目的としてプロジェクトを行ってきた。まちに（仮設）空間を設置し「場」に「出来事」を起こすことで，サイトの持っている意味を顕在化させたり，変化させることを行ってきた。

今回の報告は新潟県十日町市という，私たちが日常暮らす場所から遠く離れた場所において行ったプロジェクトについてであるが，私たちのような部外者の視点がかえって地域の問題や特性を顕在化させることができると考えている。その場にある様々なストック（人，もの，空間，環境）の有用性は当たり前にそこで暮らす人々にはむしろ見えにくくなっているということもある。それらの魅力的なストックを発見し，積極的に利用することにより，場所の特性が顕著に現れる空間となる。

このような実践は結果としてサイトの地域資産を使いながら，既存空間の質を再発見，顕在化させ，新たな場を作り出すことになる。そこで，このような一連のフィールドワークを「サイト・リノベーション」と呼んでいる。

■越後妻有アートトリエンナーレについて

今回のプロジェクトは「大地の芸術祭—越後妻有アートトリエンナーレ」への参加要請があったことからスタートしている。これは，3年に一度，新潟県十日町市（旧十日町市，川西町，中里町，松代町，松之山町が合併）津南町の里山76000ヘクタールを丸ごと会場として展開される自然とアートと人間の「3年大祭」である。

総合ディレクターである北川フラム氏は「20世紀は都市の時代であったが，都市の発展だけではこの国も世界も危うくなってきたこと」をあげ，「都市と地方の交歓」を進めてゆきたいと語っている。

今回で3回目となる国際的現代美術展であり，2006年7月23日から9月10日まで，45の国と地域から約200組のアーチスト等の作品が制作，設置された。（前回までの恒久設置作品を加えると330を超える作品数である。）

■建築家と現代美術展

近年，こうした国際的な現代美術展に建築家が参加要請されることが増えており，この越後妻有アートトリエンナーレにおいても，多くの建築家が様々な形で関わり参加しており，その活躍が伝えられている。今日様々な領域を超えた活動が見られるが，建築と美術の間も同じようにジャンルの垣根を越えた試みが現れ始めている。

■越後妻有アートトリエンナーレ2003「ユキのウチ」

杉浦研究室は越後妻有アートトリエンナーレ2003より参加しており，「Snow in/in Snow ユキのウチ」というタイトルで，2006年と同じ敷地で参加している。このプロジェクトは新潟県十日町市内，本町西1丁目にある実際に生活している民家6軒7棟を防球ネットで繋ぎ，プライベートな私有地を，囲みながら交流空間とし，セミ・パブリックに町に開いたものである。2003年の7月20日から9月7日の約1ヶ月半の開催期間に向け数ヶ月前から地域住民の方々と協働して作品制作を行った。

■2004年新潟県中越地震

このような協働作業の中で，地域の人と濃密な交流が起こり，空間設置後も研究室の学生が地域の雪祭りや着物祭りに参加するなど，大変活発なコミュニケーションが発生したことが，おまけの成果としてあり，総合ディレクター北川フラム氏の狙いどおり，地方と都市の交歓や若い学生と地域の中高年層との世代間交流が起こったこととなる。

しかし，残念なことに2004年に新潟中越地震がおこり，この場所は市内で一番の被害地となってしまった。2003年のプロジェクトのまさに中心の家の住民が地震でショック死され，全壊取り壊しとなり，近隣の住民も仮設住宅での長期にわたる生活を余儀なくされるなど，地域住民のコミュニティもばらばらになりそうな状態となった。さらに倒壊した家は再生の見込みもなく，空地となった。

そんな状況のなか，2003年のメンバー等と何度かお見舞いにも伺ったが，その際2006年もまた一緒にやりたい旨のお話があり，かえってこちらが勇気づけられたことがあった。

■越後妻有アートトリエンナーレ2006「幸（ユキ）のウチ」

以上のような経緯の中，越後妻有アートトリエンナーレ2006では，「幸（ユキ）のウチ Gift in Gift」という作品を制作し，2003年と同じようなタイトルで，同じ住民の方々と協働し，同じ場所に設置した。

コンセプト内容は，同じ場所に，失われた家とその庭先を皆が行き来していた記憶を残しつつ，空地にレースの雪が降り積もったような空間をつくったものである。「皆がこの場所に戻ってきて欲しい。」という願いを，レースを編むことに託し，この場所へのギフトにしたいと考えた。

■現場にある素材

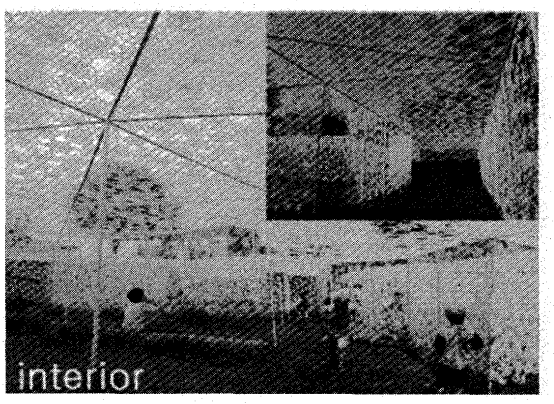
素材はすべて，その場所の日常的に存在するものを使いたいと考え，十日町のホームセンターなどで入手可能な，ごく普通にあるものを使用した。

構造の支柱には豪雪地帯新潟で冬景色としてよく見かける，雪の高さを測るための，測量用ポール（約100本）を使い，その梁には壁や天井の下地に使用するような軽鉄

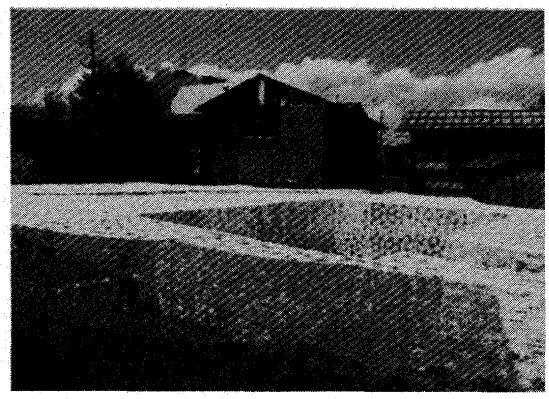
幸（ユキ）のウチ内部

来場者・住民も交えてのごったくパーティーを開催

おばあさま方に教わりながらごったく料理を作りました



重なり合うレースに包まれて，子供たちもおおはしゃぎ



ひと夏だけのハレの空間

フィールド・ワークの記録

年	月	日	杉浦研究室	十日町住民の方々
2003	7/20−9/7		越後妻有アートトリエンナーレ2003　会期	
	9	13・14	撤収作業・打ち上げ	
2004	2		十日町雪祭り雪像作りに参加	雪祭り
	5		十日町着物祭りに参加	着物祭り
	8		十日町大祭りに参加	大祭り
	10	23	中越地震	住民1人が亡くなる
	12	12	震災のお見舞い、メッセージを渡す	仮設住宅に避難
2005	1		震災のお見舞い	震災復興
	6		OG1人旅	
	8		震災から半年のお見舞い	
	9		デザインミーティング開始	
	10		第一案「スミカ」プレゼンテーション	
2006	1		第二案デザインミーティング開始	
	3	20	「幸(ユキ)のウチ」(家型案)決定	「幸(ユキ)のウチ」プレゼン
	4		モチーフ・ひものスタディ	
	5	初旬	モチーフ・ひもの決定	
	6	11	十日町にて敷地測量・写真撮影	住民数名と杉浦研打ち合わせ
	6	16	家型案から水平案に変更	
	6	24	地区会館にて説明会(杉浦研・住民・市役所職員が参加)	
レースが編まれた期間	6	25	モチーフの大きさ決定、編み始め◇	敷地周辺住民レース編み開始◇
	6	29	柱位置・ボイドの形が決定	
	6	30	十日町公民館(2か所)にてワークショップ	
	6	30	SDレビューに応募	
	7	1	草刈	
	7	2	ポール位置墨出し・モチーフつなぎ(モチーフを三角に)	
	7	8	ポール立て	
	7	9	ポール塗装・ごったく打ち合わせ	
	7	12	インテリア計画でワークショップ	
	7	13	プレスリリース	
	7	14	NHK「おはよう日本！」取材	スチール梁工事(専門業者)
	7	15	スチール塗装	
	7	16・17	モチーフつなぎ・レース設営	
	7	21	モチーフつなぎNHK取材	お祭り準備
	7	22	モチーフつなぎ・レース設営	お祭り
展覧会会期	7	23	越後妻有アートトリエンナーレ2006 開催・NHK取材	
	7	24	日本経済新聞取材	
	7	29	NHK「おはよう日本！」放送・日本経済新聞に掲載	
	8	1・2	ごったく用クッション試作	
	8	4	ごったく打ち合わせ・買い物	
	8	5	ごったくパーティー◆	
	8	25・26	十日町大祭りに参加	大祭り
	9	1	ごったく打ち合わせ、買い物	
	9	2	ごったくパーティー◆	
	9	10	越後妻有アートトリエンナーレ2006 会期終了	
	9	16・17	撤収作業・打ち上げ	
	11	12	お礼のメッセージ・写真送付	
	11	11・12	「幸(ユキ)のウチIn東京」学祭展示	
	12	12	「幸(ユキ)のウチIn東京」会期終了	
	12	20	オフィシャルブックデータ提出	
	1	31	ぺちゃくちゃないとにて発表	
特記事項	◇レースは、杉浦研究室メンバーの家族、友人、先輩後輩、十日町本町西１丁目(敷地)住民の方々、市役所・地区会館の方々など多くの人々の協力によって 約1ヶ月間かけて編まれた。 ◆ごったくパーティーは、杉浦研究室メンバー・十日町住民の方々だけでなく、それらの友人・知人や見学者も交えて行われた。参加条件は「1品または1本持ち寄り」であった。			
主催	杉浦久子研究室			
協力	十日町本町西１丁目住民の方々、市役所・地区会館の方々、杉浦研究室OG			
来場者の感想	住宅地の中に現れた夢の空間 / みんなの願いを感じた / 迷路みたい / レベルの使い方が良い ごったく料理がおいしかった / 暑いのに雪で覆われている半年後の景色を見ているようで不思議			

写真

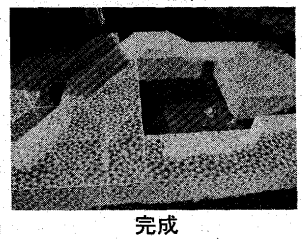
敷地測量・写真撮影

住民説明会

ポール立て

スチール塗装

レース設営


完成

ごったくパーティー

日本経済新聞　2006年（平成18年）7月29日（土曜日）

アート探究

越後妻有アートトリエンナーレ

地震乗り越え大地と結ぶ

作家・住民が協働

新潟県十日町市と津南町にまたがる広大な地域を舞台にした三年に一度の美術の祭典「大地の芸術祭　越後妻有アートトリエンナーレ二〇〇六」が二十三日に開幕。里山の夏に色とりどりのアートの花を咲かせている。新潟県中越地震と豪雪という過酷な自然災害を乗り越え、住民と作家がアートを通して大地と結び合っている。

雨で湿ったブナ林の坂道を、おそるおそる上っていく。平たんなアスファルトに慣れきった足と眼が、急勾配のぬかるんだ地面に悲鳴をあげる。靴は泥だらけ。カタカナの「アート」のイメージとはほど遠い世界だ。

だが次の瞬間、目を疑う光景に突然出くわす。林が少し開けた空間、ブナの木の根元に、奇く光る宝石のような花々が一面に植わっているのだ。木漏れ日に反射してキラキラと輝くさまは、世界でここだけに咲く幻の花を見るよう。だれもが「ほお」と感嘆の声を上げる。

十日町市中平に完成した「ここスの花――あの頃へ」という作品だ。ビーズで造った人工の花約三万本を地面に直接植え込んだ。「心に生まれたイメージが実際にこの土地に立ったときにはっきり形になって見えた」と作者の菊池歩氏。いわば大地とのコラボレーションだ。

○　○　○

新潟の豪雪地帯に位置する妻有は、夏の間、緑の谷と棚田が美しい田園風景に装色を変える。東京二十三区よりも広い七百六十平方キロが舞台。三回目となる今回は、四十カ国・地域から約二百組のアーティストが参加し、三百二十以上の作品が展示された。

展示の場所や方法は様々だ。棚田のあぜ道に二千個の陶のブロックをフェンス状に連ねた杉浦康益の「風のスクリーン」、人の不在や記憶をテーマに廃校で大掛かりな空間インスタレーションを展開したボルタンスキー＋カルマンの「最後の教室」、古民家内部の柱や壁の表面をひたすら彫刻刀で彫りアートの家として再生させた日本大学芸術学部有志の「脱皮の家」。田んぼには公募で選ばれたカラフルでユーモラスなかかしたち。それらが広大な敷地のあちこちに点在している。

「郷土の情報を長短のアクセスで見られる美術展などとは逆に、離れた場所に少しずつ作品を点在させるのが最大の特徴」と総合ディレクターの北川フラム氏は語る。「ここれだけ離散させておくと、その間の濃密な風景がアートの見方を変えてくれる。作家も必ず『場』の発見をしてくれると考えた」

○　○　○

多くの作品の中で特に目をひくのは、作家が地域住民と「協働」して造った作品だ。例えば、稲の刈り取りから収穫までをともに行い、その藁で渦巻き状のトンネルを造った宮裕子「大地のグルグル」。収穫後の積み藁のように褐色に溶け込んで見えるのは、農家の厳かな労働が作品に息づいているからだろう。

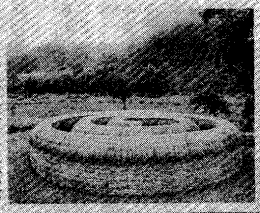
杉浦久子氏と杉浦友哉と昭和女子大学杉浦ゼミの「雪のウチ」は、二〇〇四年の中越地震で倒壊した二軒分の家の跡地を利用し、レースの布でできた白い構造物を出現させた。棚包用の特殊なひもで編みこまれた八千個の白い花は、ゼミの教師・学生とともに、地域の住民が総出で編み上げたものだ。

実はこの空き地は前回の〇三年、同じ杉浦ゼミの講師と学生たちが、六軒の家を白いネットで覆うテントを展開した場所。そこの住人数人が、震災の犠牲となった。白く降り積もった雪をイメージした今回の作品では、家のあった部分をぽっかり空白にし、かつての主の不在を告げている。

杉浦久子氏は「前回の後も学生と住人との交流が続いていた。温かく迎えてくれた方が被害に遭われて、震災は避けて通れないテーマになったと話す。ただし被災の苦しみはかえって作り手と住民の結びつきや情熱を強めた。四年生の堀江知世さんは「地元の人が積極的にコミュニケーションを取ってくれて、東京でこもって作業するよりはるかいがいたこと」という。

「ここスの花」も、中平集落にある十七軒の家族が花づくりを熱心に手伝い、当初二万本の予定が三万本に増えた。「中には『あの山全部をたにしよう』とはりきる方もいた。小さな手仕事を通して、みんなでもう一度やろうという気持ちが伝わってきた」と菊池氏は振り返る。

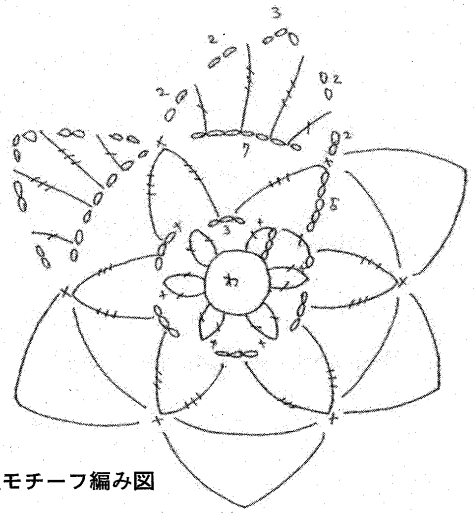
「アートは直接地域の経済振興にはつながらないが、金銭がからまないからこそ人がつながっていけるのではないか」と北川氏。十年かけて徐々に盛り上がってきた芸術が、人と土地を結ぶアートの新しい可能性を示している。（文化部　富田淳之）



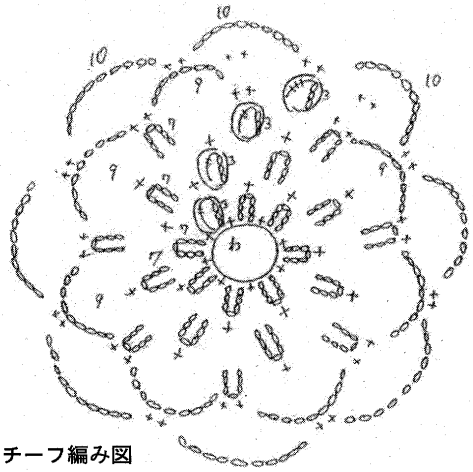
雪のトンネル「大地のグルグル」とレースで編んだ雪のウチ

ブナ林の中、3万本のビーズの花が咲く（新潟県十日町市）＝写真　半田裕久

日本経済新聞 2006 年 7 月 29 日朝刊



星型モチーフ編み図



花型モチーフ編み図

(136 本)，雪の結晶を表現するレースには梱包用のかた撚り紐（約 400 玉（140 km））を使い，約 10000 モチーフのかぎ針編みにより出来ている。

■協働作業　関係した人々

この，編むことや設営する作業に関わった人は十日町＋東京で約 100 人になる。

特に編み作業は研究室の学生を中心として，生活環境学科の私の授業関連有志学生，十日町の本町西 1 丁目をはじめ，商店街や近隣の地域住民，区役所の職員の方々など，裾野はもはや把握できないところまで，多くの女性たちにより支えられた。

設営と解体作業は本町西 1 丁目の男性の方々を中心に，これもその住民ネットワークにより，様々な方が関わり成立した。編まれたモチーフを展開図どおりにシート状に繋げる作業は，私たち研究室メンバーで行い，十日町の除雪関係施設内の 60 畳の作業所で（市役所の協力により貸していただいた。）毎週末新潟に通い行った。

■セルフ・ビルド　農業的コミュニティ

すべての作業は手作業，セルフ・ビルドで行っており，なにか農業的作業を想起させ，そこにそうした作業の過程に付随して起こるのと同じようなコミニュティが生まれたように思う。マンパワーの素晴らしさ，黙々とした協同作業の中でのある種の連帯感を，身をもって体感した。

思いのほか敷地は広く，作業途中には時間内に完成できるのかどうか，大変不安な状態でもあったが，被災された十日町のお母さんパワーに逆に励まされながら，研究室の学生とともに，徹夜作業の中，皆の願いと祈りの込められている様なレースに，パワーが宿ってゆく過程を経験した。

■サイトからの想起

設置した場所にある，小さな用水にかかった鉄板の橋のみがここに残ったもので，これはかつてあった家の玄関口であった。ここを同じく入り口として，夏，空地に雪が降り積もり，かつてあった家へのアプローチ部分と家のあった場所，その庭先の皆が行き交っていた通り道だけが，雪掻きされたように雪が無くなっている状態を表現した。かつてここにあったものと人の不在を静かに表したいと思った。夏にレースの雪が降り積もったイメージで，もとの家の跡と庭の通り抜けの道がボイドになり，図と地の反転が起きている。

タイトルの「幸（ユキ）のウチ」は 2003 年の「ユキのウチ」から繰り返し立ち現れた記憶といった意味も込め，この場所が皆に幸をもたらす場となるよう再生への祈りを込めた。

■サイトに起こったリノベーション

内観はレース越しに見る空が時間によって移ろい，空を映し白に青が透けたり，夕暮れに全体に赤く染まったレースなど，現場の美しい自然を映し込み，想像以上の効果があった。

レースの重なりも，見え隠れする迷路状の空間を作った。

また，座ってレース越しの空を眺めてほしいと考えたため，全体に高さを抑えている。入り口から地形が下がっているので中に入ってゆく人を外から見ると，雪のボリュームに入って見えなくなってしまうように計画した。

会期中は，雨の日も晴れの日も，本当にたくさんの方がみえた。近所の子供たちの遊び場となったり，都会（東京）から，あるいは新潟の近隣地域から，またごく近所の方々など，多様で世代も様々な人々が訪れた。

■交流空間

作業の様々な場面で，近所のおかあさん方によるお惣菜や漬物，お茶，ビールなどの差し入れが日常的であった。学生たちもとても感動し，この暖かなおもてなしの心を他の人たちにもと考え，行ったのが「ごったくパーティー」である。

「ごったく」とはこの地方の方言で，寄り合いがあるときに振舞われる郷土料理とのことである。会期中 2 度行われたが，地域の人や東京からの見学者に私たちとおばあさま方で作った料理を振舞い，大賑わいであった。

すべての料理（ぜんまいや棒だらの煮物，ずいきなどのスペシャリテ。）は地域のごったく名人のおばあさま方に習い，いっしょに数日かけて料理を行った。

■雑感

表通りから一本入った住宅地に唐突に現れるこの景色は，はじめはシュールに見えていたが，終わりに近づくと草も生え周辺と馴染んでいた。

住宅街の中，空と地面の間に，皆の居場所がここに生まれたように思う。ひとつの環境装置のような，ひととき現れ消えてしまう雪のような空間となった。

震災があったことさえ，他地域の人には忘れられそうなほど周辺は普通の場所に戻っているが，この当然の大きな空間は，静かにここに起こったことを想起させた。

ここでたくさんの人の出会いが生まれたこと，多くの楽しい表情がここで見られたことが，何より嬉しく思えたプロジェクトであった。

■掲載，発表記録

1　新建築　2006年9月号
「広大な自然の中に種をまくようにアートを配することによって作られる空間」(pp123-127)
掲載ページ: p126

2　美術手帖　2006年9月号
「大地の芸術祭の幕が開いて」(pp130－133)
掲載ページ: p132（写真），p133（テキスト）

3　日経アーキテクチュア　2006年9月11日号
「建築家×美術家＝地域再生？」
(Next-A　pp 2-7)
掲載ページ: p5

4　地域創造　2006年秋号
「フェスティバルの行方」
掲載ページ: p8

5　ＮＨＫ「おはよう日本！」
放送日: 2006年7月29日

6　日本経済新聞　2006年7月29日朝刊「アート探究」掲載
越後妻有アートトリエンナーレ2006ホームページ
http://www.echigo-tsumari.jp/
参加作家紹介ページ
http://www.echigo-tsumari.jp/writer/index.html
ぺちゃくちゃないと　Vol. 38
2007年1月31日　六本木Super Deluxe　にてプレゼンターとして発表
http://www.klein-dytham.com/J/pechakucha/460.php

■関連記録

1　『リノベーションの現場　協働で広げるアイデアとプロジェクト戦略』
五十嵐太郎/リノベーション・スタディーズ編　彰国社　2005年12月30日
部分執筆　杉浦久子「テーマ7　美術とリノベーション　居場所をつくる―サイト・リノベーション」

2　生活環境学科杉浦久子研究室
http://www.sww.ac.jp/prof/sugiura/

3　『大地の芸術祭　越後妻有アートトリエンナーレ2003』
大地の芸術祭・花の道実行委員会東京事務局編，監修
現代企画室　2004年2月13日
部分執筆　杉浦久子「ユキノウチ」p68

4　『大地の芸術祭　越後妻有アートトリエンナーレ2006』
大地の芸術祭東京事務局編　北川フラム/大地の芸術祭実行委員会監修　現代企画室　2007年5月7日
部分執筆　杉浦久子「幸［ユキ］のウチ」p85

（すぎうら　ひさこ　　生活環境学科）
（しみず　まり　　生活機構研究科生活科学研究専攻生）